

宗教改革期信条における「神の子とする」教理

齋藤五十三

キリストと世界 29 号抜刷 2019.3.1

宗教改革期信条における「神の子とする」教理¹

齋藤五十三

(日本同盟基督教団 台湾宣教師／東京基督教大学非常勤教員)

序

20 世紀後半になって影響力ある神学者が関心を抱き始めるまで²、救済論における「神の子とする教理（以下 Adoption）」が神学史を通じ、総じて見過ごしにされて来たことは、徐々に共通認識となってきた³。20 世紀後半になって、まず Adoption に注目し始めたのは聖書学の分野であった。新約聖書中、パウロ書簡においてのみ 5 回しか用いられていないギリシャ語の単語 “*huiiothesia*” の特異性に聖書学者が注視するようになったのである⁴。この *huiiothesia* を契機とし

- 1 本稿は、筆者がアムステルダム自由大学神学部に提出した博士論文：“Divine Adoption in the Confessions of the Reformation Period” (Ph. D Dissertation, Vrije Universiteit Amsterdam, 2016) の第一章：“Introduction” を一つの論文の体裁に翻訳、編集したものである。
- 2 Joel Beeke, *Heirs with Christ: The Puritans on Adoption* (Grand Rapids: Reformation Heritage Books, 2008), 5: “The twentieth century saw a burst of evangelical writings on adoption, including several popular books by solidly Reformed men such as Sinclair Ferguson, Mark Johnston, and Robert Peterson.”
- 3 J・I・パッカー、山口昇訳『神について』いのちのことば社、2000 年、415 頁「子とされることについての真理がキリスト教の歴史において、ほとんど関心を抱かれなかったのは不思議なことです」。今日、多くの神学者がこの点を指摘している。影響力のある著作としては、以下。Trevor J. Burke, *Adopted into God's Family: Exploring a Pauline Metaphor* (Downers Grove: InterVarsity Press, 2006); James Scott, *Adoption as Sons of God: An Exegetical Investigation into the Background of Huiiothesia in the Pauline Corpus* (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1991).
- 4 S. B. Ferguson, “The Reformed Doctrine of Sonship,” *Pulpit and People: Essays in Honor of William Still on his 75th Birthday* (Edinburg: Rutherford House, 1986): 84. *Huiiothesia* が用いられている箇所は以下：ローマ 8:15-23、9:4、ガラテヤ 4:5、エペソ 1:5。

た Adoption への関心は、やがて神学の他の分野にも広がり、21 世紀に入ると Adoption を本格的に扱った歴史神学、組織神学の論文が現れることとなる。組織神学者でありピューリタン研究家としても知られる J・ビーケ (Joel R. Beeke) によれば、現時点において以下の 2 つの博士論文が Adoption を扱ったものとしては 21 世紀を代表しているという。一つは歴史神学の分野における T・トランパー (Tim J. R. Trumper) の論文: “An Historical Study of the Doctrine of Adoption in the Calvinistic Tradition”⁵、もう一つは組織神学の分野における D・ガーナー (David B. Garner) の論文: “Adoption in Christ”⁶ である。

この二人のうちトランパーは、神学史全体において Adoption がどのように取り扱われてきたか (或いは取り扱われてこなかったか) という主題に関し、その後も研究を重ね⁷、Adoption の神学史研究においては、その著述に目を通すべき重要な神学者の一人になっていると言えよう。トランパーによる Adoption を巡る神学史の分析は、結論としては以下のようにまとめられる⁸。教会教父時代から 20 世紀後半に至るまで Adoption を神学的に掘り下げていく契機は何度かあったものの、当時の様々な時代状況がそれを阻み、結果として Adoption 理解における十

Huiothesia の特異性とは、使用される 5 箇所並びにその文脈を釈義すると、神の救いの計画全体を選びから終末まで網羅する贖罪の救済史観 (Redemptive-historical perspective) の枠組み全体が明らかになることである。Saito, “Divine Adoption,” 2-6. この枠組みを詳細に解説しているものとしては以下。Tim J. R. Trumper, “A Fresh Exposition of Adoption I: An Outline,” *Scottish Bulletin of Evangelical Theology* (hereafter *SBET*) 23 (Spring 2005): 60-80; idem, “A Fresh Exposition of Adoption II: Some Implications,” *SBET* 23 (Autumn 2005): 194-215.

- 5 Tim J. R. Trumper, “An Historical Study of the Doctrine of Adoption in the Calvinistic Tradition” (Ph. D dissertation, University of Edinburgh, 2001).
- 6 David B. Garner, “Adoption in Christ” (Ph. D dissertation, Westminster Theological Seminary, 2002). なおガーナーの論文は、最新の研究成果を加える形で新たに出版された。David B. Garner, *Sons in the Son: The Riches and Reach of Adoption in Christ* (Phillipsburg: P&R Publishing, 2017).
- 7 Tim J. R. Trumper, “The Theological History of Adoption I: An Account,” *SBET* 20 (Spring 2002): 4-28; Trumper, “The Theological History of Adoption II: A Rationale,” *SBET* 20 (Autumn 2002): 177-202.
- 8 Trumper, “The Theological History I,” 27-28.

分な掘り下げがなされることはなかった。このように神学史全体を結論づけるトランパーであるが、その一方で Adoption に大きな関心を寄せた例外的な神学者が一人、そして例外的な信仰告白文書も1つあったことをもトランパーは指摘している。その神学者とはカルヴァン（1509-64年）であり、告白文書とは信条史において初めて Adoption に1つの章（12章）を割いたウェストミンスター信仰告白（1647年、以下WCF）である。カルヴァンが Adoption に大きな注意を払ったことは、カルヴァン研究の分野で他の学者によっても指摘されているところであるが⁹、信条史と Adoption の関連に注目したのはトランパー以外には皆無と言ってよい。トランパーはP・シャッフ（Philip Schaff）編集による信条集¹⁰を精査し、その上で、WCF以降から現在に至るまで Adoption に章や項目を充当して主題的に扱った信条がわずか5つしかないことを指摘¹¹、宗教改革期のプロテスタント信条がWCFに至るまで Adoption を軽視してきたのはもちろん、信条史全体としても Adoption を見過ごしにしてきたと結論づけている¹²。本稿は、このトランパーによる信条史分析の中でも、特に宗教改革期の分析が妥当かどうかを起点としながら、宗教改革期の告白文書における Adoption の取扱いや位置づけを明らかにすることを主要な課題（main research question）としていく。筆者は、宗教改革期の告

- 9 例 えば G. A. Wilterdink, "The Fatherhood of God in Calvin's Thought," *Reformed Review* 30 (Autumn 1976): 17; R. C. Zachman, *The Assurance of Faith: The Conscience of the Theology of Martin Luther and John Calvin* (Minneapolis: Fortress Press, 1993), 247; Ferguson, "The Reformed Doctrine of Sonship," 82.
- 10 Philip Schaff, ed., *The Creeds of Christendom: With a History and Critical Notes*, vol. 3 (New York: Harper, 1919).
- 11 Trumper, "The Theological History I," 7. WCF以降、Adoptionに章等を充て主題的に扱ったのは以下の告白文書である。*The Savoy Declaration* (1658), *The Baptist Confession of Faith* (1689), *The XXIV Articles of the Presbyterian Synod of England* (1890), *The Confessional Statement of the United Presbyterian Church of North America* (1925), and *The Basis of Union of the United Church of Canada* (1925).
- 12 Trumper, "The Theological History I," 13: "The truth is that adoption has rarely been accorded official creedal recognition." (Adoptionが信条により公的な認証を受けることは極めて稀であったというのが事実である) 邦訳は拙訳。トランパーがこう結論づける主要な根拠は Adoption を主題的に扱った告白文書が希少であるという点である。Ibid: "The small number of confessions that allot adoption a distinct chapter or section."

白文書は Adoption 軽視と評価されるものではなく、カルヴァン前後の信条史中にも Adoption を認めることのできる神学的な手掛かりがあるとの仮説を立てつつ、以下の順序に従って論考を深めていく。

まず第1章において、本稿は *huiiothesia* の提示する贖罪的救済史観がどのようなものであるかを概観する。第2章は Adoption を巡る今日の神学的動向と幾つかの共通認識 (consensuses) に目を留める。第3章はトランパーの神学的功績を考察した上で、彼の信条分析の方法を批判し、第4章は信条史を Adoption の観点から分析するための新たな方法を提案していく。

第1章 *huiiothesia* の提示する贖罪的救済史観

本稿における論考を進めるためには、まず聖書における Adoption の概念を把握する必要がある。そのためには Adoption と訳されるギリシャ語の単語 *huiiothesia* をパウロがどのように用いたのかを考察しなければならない。*huiiothesia* は新約聖書記者中、パウロだけが使用した特異な語彙であるが、その言語的背景は主にローマ法の養子制度であるとの見解が今日では主流である¹³。パウロがこの語彙をもって示そうとしたのは神の救いの計画全体であり、しかもその計画は、神の永遠の聖定における選びに始まり、終末における神の子らの神の国相続をもって完成するという、救いの御業の歴史的漸進性を描く枠組み (贖罪的救済史観、redemptive-historical perspective) を持っている。以下、この歴史的進展を理解するため、「選び」より始めて *huiiothesia* が用いられる5つの箇所を順に概観していく¹⁴。

第1節 「選び」エペソ1章5節を中心に

13 ローマの養子制度と聖書の *huiiothesia* の概念の間には、成人の養子が主流である点など、幾つか重要な共通点が見られる。Saito, "Divine Adoption," 6-8. そのため *huiiothesia* は、ローマの制度に通じる読者にとって理解しやすい語彙であり、自らローマ市民権を持つパウロがこの語彙を用いた意図もそこにあるとされる。確かに *huiiothesia* が用いられている書簡はいずれもローマ法の適用される地域の教会に宛てて書かれている。Burke, *Adopted into God's Family*, 194.

14 Saito, "Divine Adoption," 2-6.

神は、みこころの良しとするところにしたがって、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと〔*huiiothesia*〕、愛をもってあらかじめ定めておられました。¹⁵

Adoption（神の子どもとすること）は救済論における概念である。それは「生まれながら御怒りの子」¹⁶であった私たちに、神が一方的なあわれみのゆえに、神の子としての身分を与えるという救いの恵みを意味する¹⁷。神はこの恵みを与えるべく「世界の基が据えられる前から」¹⁸、救済的意図¹⁹をもって「あらかじめ定めておられ」た。しかも神の子の身分を与える方法も、選びの段階ですでに定められていた。それはイエス・キリストにより、神の家族に加えるという方法であり、こうした救済の意図はすべて「愛」に動機づけられたものであった。

第2節 「契約」ローマ9章4節

彼らはイスラエル人です。子とされることも〔*huiiothesia*〕、栄光も、契約も、律法の授与も、礼拝も、約束も彼らのものです。²⁰

歴史において最初に Adoption の恵みが具体的に示されたのは、イスラエルに対してであった。それは出エジプトにおいてイスラエルを「奴隷の家から」²¹ 導き出

15 エペソ 1:5。本稿は、邦訳聖書については新改訳 2017 から引用する。

16 エペソ 2:3

17 パッカーは Adoption を義認にまさる「最高の恵み」に位置づけている。パッカー、前掲書、371 頁

18 エペソ 1:4

19 新改訳 2017 で「みこころ」（5 節）と訳されるギリシャ語 “*thelema*” は、本来、神の主体的かつ救済的な目的を強調するものである。Peter T. O'Brien, *The Letter to the Ephesians* (Grand Rapids: Wm B. Eerdmans, 1999), 103.

20 ローマ 9:4

21 出エジプト 20:2。聖書中「ユダヤ人」という名称が、他の民族と区別するための一般的用語であるのに対し、「イスラエル」は「神の選びの民」を含意する、救済史的観点をもった名称である。Douglas Moo, *The Epistle to the Romans* (Grand Rapids: Wm B. Eerdmans, 1996), 560–61; Leon Morris, *The Epistle to the Romans* (Grand Rapids: Wm B. Eerdmans, 1994),

すことをもって示されたのである。ローマ9章4節における *huiiothesia* は、そのように出エジプトの出来事に関連性を持つものであるが²²、ここで言及されるイスラエルの神の子性とは、個々のイスラエルの民が、出エジプトにおいて皆、自動的に神の子とされたことを意味するものではない。それは神に信頼し、その教えに従う時に、神の子として受け入れられるという契約として理解されるべきものである²³。

第3節 「救済」ガラテヤ4章5節を中心に

しかし時が満ちて、神はご自分の御子を、女から生まれた者、律法の下にある者として遣わされました。それは、律法の下にある者を贖い出すためであり、私たちが子としての身分を受ける〔*huiiothesia*〕ためでした。²⁴

時が満ちて、神は御子を遣わすことをもって Adoption を成就された。御子の派遣の目的は2つあり、1つは律法の下にある者を贖い出すため、もう1つは贖われ

348; James D. G. Dunn, *Romans 9-16*, Word Biblical Commentary Vol. 38B (Dallas: Word Books, 1988), 533; Thomas R. Schreiner, *Romans* (Grand Rapids: Baker, 1998), 483.

22 ホセア 11:1 は出エジプトを、父なる神がその子を呼び出す救いの出来事（旧約版の Adoption）と理解している。「イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、エジプトからわたしの子を呼び出した」。

23 Moo, *The Epistle to the Romans*, 562; Morris, *The Epistle to the Romans*, 348; C. E. B. Cranfield, *The Epistle to the Romans* (Edinburgh: T&T Clark, 1975), 461. ホセア 11:1 だけでなく、イスラエルの神の子性という概念は、旧約聖書を通じて見られる。申命記 14:1、32:6、ホセア 1:10 等。ちなみにギリシャ語七十人訳聖書、またパウロと同時代のユダヤ文書はいずれも語彙としては *huiiothesia* を使用していない。ローマ 9:4 でこの語彙が用いられたのは明らかに意図的で、パウロはこの語彙により、救済の恵みが新旧両約聖書を通じて一貫していることを伝えようとしたと考えられる。Dunn, *Romans 9-16*, 533; Herman Ridderbos, *Paul: An Outline of His Theology*, trans. John R. De Witt (Grand Rapids: Wm B. Eerdmans, 1975), 198. リダボスは *huiiothesia* の背後にある旧約の背景を重要視する。

24 ガラテヤ 4:4、5.

た者が神の子の身分を受けるためであった²⁵。しかも神はこの Adoption の恵み及び特権を²⁶、イスラエルだけでなく異邦人にまで拡大し、「アバ、父よ」と呼ぶために御子の御霊を「私たちの心に遣わされた」²⁷。この御霊により私たちは、キリストがそうされたのと同様に、神を父と呼ぶ特権を得、父との交わりを楽しむ者とされたのである。

第4節 「聖化・聖霊論」ローマ8章15節を中心に

神の御霊に導かれる人はみな、神の子どもです。あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする [huiothesia] 御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と呼びます。²⁸

Adoption により神の子どもとされた私たちは、御霊に導かれて生きる倫理的な責任を持つ。それはすなわち「肉に従って生きる」のではなく「御霊によってからだの行いを殺す」生き方である²⁹。換言すれば、神の家族に属する身分に相応しい生き方が期待されているということであるが、その生き方を最も特徴づけるのは、子とする御霊に導かれる祈りの生活である。御霊は、信仰者たちに神の子であることの確証を与え、彼らが自由に確信をもって天の父に祈るようにと助けていく³⁰。

25 同上 4:5 には目的を表すギリシャ語の *hina* が2つあり、贖いと Adoption がその2つの目的に該当する。しかし御子受肉の意図を論理的に考察すれば、より強調が置かれているのは2つ目の目的 Adoption であるとブルース等は主張する。F. F. Bruce, *The Epistle of Paul to the Galatians* (Homebush: Bookhouse Australia, 1982), 197; Ridderbos, *Paul*, 199, 201.

26 神の子の身分には当然、子としての特権(子としての保護、相続等)が伴う。同上 4:7「子であれば、神による相続人です」。

27 同上 4:6.

28 ローマ 8:14、15.

29 同上 8:12-17. James D. G. Dunn, *Romans 1-8*, Word Biblical Commentary Vol. 38A, (Dallas: Word Books, 1988) 450.

30 Morris, *The Epistle to the Romans*, 314-16; Dunn, *Romans 1-8*, 451, 453-54; Cranfield, *The Epistle to the Romans*, 400. こうした父との交わりは、本来的には御子キリスト固有の権利であったが、キリストはその権利を神の子らに分かち合われたのである。キリストは Adoption において信仰者を御自分の子性に与らせ、御自分の特権を分かち合うが、これもそ

キリストの地上での生涯がそうであったように、神の子らも地上においては様々な苦難に遭うことを避けられないが、神の子らは祈りつつそうした苦難を乗り越えていく。しかも、その苦難は意味のないものではなく、むしろ神の国の共同相続人としての栄光へと結実していくのである。

第5節 「完成（栄化）に向けて」ローマ8章23節を中心に

私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。それだけでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にさせていただくこと [huiiothesia]、すなわち、私たちのからだに贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています。³¹

今や、神の子たちは全被造物すべてとともに深いうめきをもって、救い主の再臨、すなわち贖いの完成される時を待ち望んでいる。その時に彼らの体は栄光の体へとよみがえらせられ、全被造物もまた「神の子どもたちの栄光の自由に」あずかるようになる³²。この箇所ではパウロは、贖いの完成を「子にさせていただくこと [huiiothesia]」と表現している。これは、キリストの贖いの御業のゆえに、信仰によってすでに与えられた神の子の身分が、御霊による初穂³³であり、未だ最終的な完成を見ていないことを示している。この意味において神の子たちは、Adoptionの恵みが完成に至る「からだの贖い」を待望しながら、「すでに」と「未だ」の緊張関係の中を歩んでいるといえる。このように神の子どもたちの歩みは、神の子としての身分に根拠を置く、完成に向けた希望に特徴づけられているのである。

の一例である。

31 ローマ8:22、23。

32 同上8:18-25。全被造物が贖いの完成を待ち望んでいるのは、人の堕落のゆえに被造物が虚無に服したからである。Morris, *The Epistle to the Romans*, 321. 「産みの苦しみ」(22節)への言及は、神の子らの今の苦難が決して無に帰するものではなく、確かな希望がそこにあることを伝えるためである。Ibid., 323; Dunn, *Romans 9-16*, 472-73.

33 「初穂」と言われているのは、この後Adoptionの完成において、さらなる祝福が続くからである。Morris, *The Epistle to the Romans*, 323; Dunn, *Romans 9-16*, 473; Ridderbos, *Paul*, 203.

第2章 今日の神学的動向と共通認識

第1節 神学的動機³⁴

20世紀後半から、聖書学の分野における *huiiothesia* への関心が契機となり、神学各分野にも広がりを見せてきたことはすでに述べた通りである。そうした動向を知る時に、何が一部の神学者たちを Adoption という主題に向かわせるのか、そこに働いている神学的動機を知ることは有益である。もちろん聖書学の分野においては、*huiiothesia* という特異な語彙への関心という動機があったわけだが、それが神学の他の分野³⁵にも広がっていったということはすなわち、Adoption の概念を探究することが、他の神学分野においても実りをもたらすと期待されたからに他ならない。

それでは、その期待とはいったい何であるのか。それは簡潔に言えば、これまでの既存の救済論に新たな光を投げかけてくれることへの期待である。これまでの救済論では、神の法廷に立つ罪人がキリストの義によって裁判官である神より無罪宣告を受けるといふ、いわゆる信仰義認による法的理解が中心であった。そこでは神と人の間にある垂直的關係 (vertical relationship) が強調され、義認自体の理解においても法的側面 (forensic aspect) が専ら強調されてきたのである。それに対し Adoption に注目する神学者たちは、神と人との關係の法的側面だけではなく、關係的 (relational) もしくは家族的側面 (familial aspect) が Adoption によって回復されることを期待しているのである³⁶。換言すれば、こうした神学者たちは、救済論における「救い」の意味が聖書的に、よりバランスを取った形で再定義されることを期待していると言える。すなわち、これまで神と人の關係の法的回復に救

34 Saito, "Divine Adoption," 10.

35 聖書学の分野では前掲の T. J. Burke, *Adopted into God's Family*. 組織神学の分野では、前掲の R. C. Zachman, *The Assurance of Faith*. ピューリタン研究の分野では同じく前掲の Joel Beeke, *Heirs with Christ*. 実践神学の分野では、J. Stevenson-Moessner, *The Spirit of Adoption: At Home in God's Family* (Louisville: John Knox Press, 2003) 等が挙げられる。

36 Julie Canlis, "Calvin, Osiander and Participation," *International Journal of Systematic Theology* 6, no. 2 (2004): 181; J. Scott Lidgett, *The Fatherhood of God in Christian Truth and Life* (Edinburgh: Kessinger Pub., 1902), 53; S. B. Ferguson, *Children of the Living God* (Edinburgh & Carlisle: The Banner of Truth Trust, 1989), 3.

いの意味の力点が置かれてきたものに、今後は家族的な方向も加えられること、すなわち救いとは「神の家族への回復」でもあることが再認識されることを期待しているのである。

こうした救済論における家族的側面の回復は、ポストモダンと呼ばれる現代の必要に応える動きでもあると言える。現代においては、伝統的な価値観の解体と共に、伝統的な家族のモデルもまた世俗的な思想文化の挑戦に応えることができなくなっている。具体的には、家庭崩壊や離婚の急増、多くの人々が家庭の問題で傷を抱える時代にあって、キリスト教神学は再度、聖書的な家族の在り方を、その根源的なモデルである「神の家族」にまで遡って提示する必要に迫られているのである。

第2節 Adoption を巡る共通認識 (consensuses) ³⁷

上記の神学的動向の中、影響力のある神学者たちが、それぞれの専門分野において Adoption に注目し研究を進めて行く中で、現在、Adoption 理解においては以下の4つの認識が共有されるようになっている。①パウロによる語彙 *huiiothesia* の Adoption 理解における重要性、②神学的枠組み構築における Adoption の複数の役割 (multiple roles)、③ Adoption 理解におけるキリストとの結合 (union with Christ) の概念の重要性、④ Adoption 理解におけるカルヴァンの重要性。①の *huiiothesia* の重要性に関しては、すでに贖罪的救済史観の枠組みとの関連で述べたので、以下、②③④の順で、それぞれが何を意味するかを見ていくこととする。

1 Adoption の複数の役割

これは Adoption の教義学上の特色に関するものである。Adoption に注意を払いながら神学の体系もしくは枠組み (theological framework) を観察すると、一つの体系の中で Adoption が複数の教義領域を横断しながら、他の教理と繋がっていることに気づかされる。Adoption は本来、救済論をその主要な教義領域とするが、創造論、予定論等、その他の領域においても教義上の役割を担っているのである。トランパーは、神学の枠組み全体の中で、特に以下の4つの領域と Adoption の間に重要な関係があると分析している ³⁸。①予定論 ³⁹、②契約、③救済論および聖

37 Saito, "Divine Adoption," 28-32.

38 Trumper, "A Fresh Exposition of Adoption I," 63.

39 ここでトランパーは、「原始論 (Protology) における予定論」という表現の仕方をしてい

霊論、④終末論。Adoption のこうした教義上の役割は他の神学者たちによっても指摘されている。例えばピーターソン (Robert Peterson) は Adoption を「キリスト教信仰をアーチ状に把握する方法」(an overarching way of viewing the Christian faith) と呼び、それが「救いの初め、クリスチャン生活、そして死者のよみがえり」という複数の領域に関係していると指摘している⁴⁰。

2 キリストとの結合の重要性

教義学的に Adoption は、キリストとの結合 (union with Christ) と不可分の関係にある⁴¹。ビュルケは、パウロが自らの書簡を通して展開する救済論の土台に「信仰によるキリストとの結合」(faith-union with Christ) があることに言及しつつ、このように主張する。「信仰を通しキリスト (御子) に結ばれることで、すべての人 (ユダヤ人、異邦人) が神の息子、娘たちになることが可能となる」⁴²。これは、教義的に「キリストとの結合」が Adoption の源泉 (source) であることを意味する。

る。原始論は教義学的には稀な語彙だが、トランパーはこの広範な歴史的守備範囲を含意する語彙を用いることで、単に予定論と Adoption ではなく、救済史全体の脈絡の中で予定論と Adoption の間に関係性があることを表現することを意図したという。Trumper, “An Historical Study of the Doctrine of Adoption,” 70-71. しかしながら筆者は、こうした語彙選択の意図が妥当とは思っておらず、論考が必要以上に複雑化しないよう、ここでは単に「予定論」とした。

- 40 拙訳。Robert A. Peterson, *Adopted by God: From Wayward Sinners to Cherished Children* (Phillipsburg: P&R Publications, 2001), 7: “Adoption pertains to the beginning of salvation, the Christian life, and the resurrection of the dead.” その他にも以下の神学者たちが神学の枠組みにおいて、教義領域を横断的に超えて他の教理と繋がっていく Adoption の役割を指摘している。パッカー、前掲書、377 頁「クリスチャン生活の全体は、子とされることから理解されなければならない」。Stevenson-Moessner, op. cit., 15; Ridderbos, *Paul*, 198; Burke, “The Characteristics of Paul’s Adoptive Sonship (Huiiothesia) Motif,” *Irish Biblical Studies* 17 (1995), 41.
- 41 Trevor J. Burke, “The Characteristics of Paul’s Adoptive Sonship (Huiiothesia) Motif,” 70; Peterson, *Adopted by God*, 50-51.
- 42 拙訳。Burke, “The Characteristics of Paul’s Adoptive Sonship (Huiiothesia) Motif,” 70: “Incorporation into Christ (the Son) through faith enables all (Jews and Gentiles) to become sons and daughters of God.”

この結合により信仰者は御子キリストの神の子性 (the Sonship) に与ることで神の子性 (sonship) ⁴³ を与えられ、神の子とされるのである。

3 カルヴァンの重要性

Adoption の概念を研究していくと歴史的にも神学的にもカルヴァンが重要な役割を担っていることに気づく。カルヴァンは Adoption の重要性を、彼の後継の世代に十分に伝えることはできなかったとも評価されるが、研究者の間では、Adoption 理解に関しては今なおカルヴァンから学ぶうるものが多くあると言われる ⁴⁴。トランパーは、カルヴァンの神学において、Adoption がキリストとの結合を含む他の教理と繋がりながら、一つの神学体系の中で一貫して重要な位置を占めていると説明している ⁴⁵。またファーガソン (S. B. Ferguson) は、Adoption が改革派の伝統中に位置づけられる教理であると理解しつつ、以下のように主張している。「カルヴァンの導きに従いながら、この聖書的な強調点 (Adoption) を回復する務めは、改革派神学の伝統に委ねられている」⁴⁶。こうしたトランパーやファーガ

43 御子の子性と信仰者の Adoption による子性の間には、共通点も多くあるが同一ではない。御子の子性は永遠かつ本来的であり、信仰者の子性は Adoption による恩恵である。A. Thomas Smail, *The Forgotten Father* (Eugene: Wipf & Stock Publishers, 2001), 130-32; Burke, "The Characteristics of Paul's Adoptive Sonship (Huiiothesia) Motif," 70-71; Ferguson, "The Reformed Doctrine of Sonship," 33.

44 Wilterdink, "The Fatherhood of God in Calvin's Thought," 20.

45 Tim J. R. Trumper, *When History Teaches Us Nothing* (Eugene: Wipf & Stock, 2008), 2: "Calvin's references to adoption can be traced back to the first year after his conversion. Subsequently they became proliferate throughout in his writings, notably (but not exclusively) in his commentaries and his *Institutes*. The evidence of the importance of the motif for Calvin is seen in the rich coherence of these references; their relevance to an array of other doctrines (such as the Fatherhood of God, predestination, covenant theology, the atonement, union with Christ, justification, sanctification, Christian liberty, prayer, assurance, Christian obedience, providence, the last things, as well as baptism and the Lord's Supper); and in the explicit statements Calvin makes about the motif's importance."

46 拙訳。Ferguson, "The Reformed Doctrine of Sonship," 82: "It was left to the Reformed theological tradition, following the lead of Calvin, to recover this biblical emphasis."

ソンの主張から気づくことは、カルヴァンが、その Adoption 理解において上述の1、2の点、すなわち Adoption の複数の役割やキリストとの結合の重要性を理解し、しかもそれが聖書的な強調点であると認識していたらしいという点である。ここに Adoption 研究におけるカルヴァンの重要性があると言える。

第3章 トランパーの神学的功績と問題点⁴⁷

第1節 神学的功績

20世紀後半から一部の神学者たちが Adoption に注目するようになり、その神学的重要性を回復しようと努めていることは前述したが、トランパーは、そうした神学者の中の一人である。ピーケがトランパーの博士論文を、Adoption を扱ったものとしては21世紀を代表するものと評価したことは既述したが、博士論文だけでなく、トランパーによるその他の論文や著述もまた、他の研究者によってしばしば引用もしくは言及されている⁴⁸。

トランパーの論文、著述の強みは、その守備範囲の広さで、範囲は聖書学、組織神学、歴史神学、さらには実践神学にまで及んでいる。彼は博士論文の他に4つの論文で聖書学の領域から Adoption を扱っている⁴⁹。また博士論文ならびに2つ

47 Saito, "Divine Adoption," 33-44.

48 例えば Trevor J. Burke, "The Characteristics of Paul's Adoptive Sonship (Huiiothesia Motif)"; Joel R. Beeke, *Heirs with Christ: The Puritans on Adoption*. 等。日本では佐野泰道がトランパーを研究対象に選んでいる。佐野泰道「神学史における『子とすること』の教理（卒業研究、神戸改革派神学校、2004年）」、「カルヴァンにおける『子とすることの教理』（『改革派神学』第三十六号、2009年、82-107頁）。比較的最近の話題になった著作としては以下。Julie Canlis, *Calvin's Ladder: A Spiritual Theology of Ascent and Ascension* (Grand Rapids: Wm B. Eerdmans, 2010).

49 Tim J. R. Trumper, "The Metaphorical Import of Adoption I: A Plea for Realization I: The Adoption Metaphor in Biblical Usage," *SBET* 14 (1996): 129-45; "The Metaphorical Import of Adoption: A Plea for Realization II: The Adoption Metaphor in Biblical Usage," *SBET* 15 (1997): 98-115; "A Fresh Exposition of Adoption I: An Outline," 60-80; "A Fresh Exposition of Adoption II: Some Implications," 194-215. 博士論文は歴史神学の分野を主な領域としているが、*huiiothesia* の概念は常に論文の根底にある主題となっている。Trumper, "An Historical Study of the Doctrine of Adoption," vi-vii.

の論文⁵⁰は、歴史神学及び組織神学の観点から神学史を検証し、Adoptionが見過ごされてきた経緯を明らかにしようとするものである。特に“The Theological History of Adoption”においてはAdoptionが見過ごされてきた要因究明にも取り組んでいるが、トランパーはそれを研究史における初の試みであると主張し、Adoption研究の中で担っている自らの役割を自負しているようにも見える⁵¹。こうした数々の取り組みの中で、トランパーはAdoptionの神学的重要性を回復するためには聖書に帰ることと共に歴史から学ぶことが欠かせないと主張している⁵²。加えてトランパーは、今日における信仰義認を巡る議論にも関心を示し、N・T・ライトの義認理解にはAdoptionが欠落していると、ライト批判をも展開している⁵³。

このように広範な領域で研究を行っているトランパーだが、もう1つ特筆すべき研究領域がある。それは信条史研究である⁵⁴。既述の通り、WCF以降、現在に至るまでAdoptionに章もしくは項目を割いた信条がわずか5つしかないとを発見したことは彼の功績と言えるであろう。

第2節 問題点

このようにAdoption研究において広範な領域を扱うトランパーの著述からは多くを学びうるのであるが、彼の信条史の扱いに関しては1つの大きな問題を指摘しなければならない。それは既述したように、宗教改革期の信条史に関してである。

50 Trumper, “The Theological History of Adoption I,” 4-28; idem, “The Theological History of Adoption II,” 177-202.

51 Ibid., 178: (This is) “the first attempt that we know of to draw together in any substantive way the major reasons why adoption’s theological history has been as it has.”

52 Ibid., 198-99. トランパーはWCFの伝統を重んじるピューリタンの歴史にも通じている。Trumper, *When History Teaches Us Nothing*, 7-32.

53 Trumper, “The Theological History of Adoption II,” 195-99.

54 Trumper, “An Historical Study of the Doctrine of Adoption” ; idem, “The Theological History of Adoption I,” 4-28; idem, “Adoption: The Forgotten Doctrine of Westminster Soteriology,” in *Reformed Theology in Contemporary Perspective: Westminster, Yesterday, Today, and Tomorrow?*, ed. Lynn Quingley (Edinburgh: Rutherford House, 1997), 87-123. 上記3つの論文でトランパーは信条史をAdoptionの観点から扱っている。

具体的に言えば、宗教改革期初期からカルヴァン、そしてカルヴァンから WCF に至る Adoption の取扱いに関する歴史的な流れ (historical lines) がトランパーの分析には欠落しているのである。

トランパーによれば、宗教改革期の文書において、カルヴァンを除けば Adoption の取扱いに関して見るべきものはないとの結論であった。確かにトランパーは、カルヴァンを非常に高く評価しつつ「彼を Adoption の神学者 (*the theologian of adoption*) と呼ぶことは確かに妥当である」⁵⁵ とまで言っている。拙訳中の斜字体 “*the*” から分かるように、トランパーの言説によれば、宗教改革期に Adoption に注目したのが、カルヴァン以外には皆無であったかのようでさえある。実はトランパーは博士論文中、Adoption に関してカルヴァンに神学的影響を与えた宗教改革初期の神学者或いは著作があったのかどうかについても論考を重ねてはいる。しかし、その答えを見つけられず、これを未決の問題として論考を結んでいるのである⁵⁶。このように Adoption の取扱いに関して、カルヴァンに至る歴史的な流れが欠落している一方で、カルヴァンから WCF に至る約 80 年の信条史も、既述のように Adoption に関して言えば全く欠落しているのである⁵⁷。それは例えるならば、宗教改革初期から WCF に至る「信条史」という名の砂漠に、ただカルヴァンと WCF だけが2つのオアシスのように、前後と何の脈絡もなく孤立しているかのような神学光景である。

第3節 方法論上の問題

トランパーは、確かにシャッフの信条集全体を精査し、その上で上記の結論に導かれたのであろうが、筆者はトランパーの方法には問題があると考えている。既述したように、信条史全体が Adoption を総じて見過ごしてきたとトランパーが判断したポイントは、WCF 以降のプロテスタント信条史において Adoption に章もしくは項目を充てて主題的に扱った信条がわずか5つしかないという点であった⁵⁸。このようにトランパーの信条分析においては、信条が Adoption を主題的に個別の

55 Trumper, “The Theological History of Adoption II,” 182. 拙訳。括弧内の斜字体は筆者による付加。

56 Trumper, “An Historical Study of the Doctrine of Adoption,” 54-69.

57 Trumper, “The Theological History of Adoption II,” 7.

58 Trumper, “The Theological History of Adoption I,” 13.

論点 (*locus*) として扱っているかが最重要のポイントとなっているわけだが⁵⁹、こうした方法は彼のカルヴァンに対する評価の際にも見て取ることができる。既述のようにトランパーは、カルヴァンの Adoption 理解を高く評価している。しかしその一方、カルヴァンが Adoption の教義的重要性を後継世代に継承できなかったともトランパーは考えており、その点に関して、カルヴァンがその主著キリスト教綱要において Adoption に章や項目を充てなかったことを批判している。「(もしそれが意図的なものであったなら) キリスト教綱要において Adoption の議論に個別の章や項目を充てなかったカルヴァンの決断は、その後のカルヴァン主義神学に否定的な影響を与えたと言わざるをえないだろう」⁶⁰。この言説からも分かるように、トランパーは Adoption が適切な取り扱いを受けてきたかどうかを判断する上では、章や項目を充てて個別に扱っているかを最重要視しており、それは信条分析においても同様であった。

第4節 信条史分析における他の重要な論点

しかしながら信条史をこのような方法で分析することは果たして妥当なのだろうか。筆者は、トランパーによる信条分析の方法には以下の5つの問題点があると考えている。①一貫性を欠く方法、② Adoption に章や項目が充てられているかを重視する方法の限界、③「教理」という語彙の問題性、④ Adoption と不可分の関係

59 Trumper, "The Theological History of Adoption I," 13: "The small number of confessions that allot adoption a distinct chapter or section." トランパーはシャッフの信条理解に言及しつつ、信条史が Adoption の重要性を正当に取り扱ってこなかったことを更に強調している。Ibid: "Indeed we may infer this oversight of adoption from Schaff's comment that 'a creed may cover the whole ground of Christian doctrine and practice, or contain only such points as are deemed fundamental and sufficient'. That adoption has, historically, been deemed generally to lie outwith the fundamental or sufficient elements of the gospel is itself indicative of the church's inadequate understanding of the role and importance of the doctrine for her grasp of salvation." Schaff, *The Creeds of Christendom*, 1:4.

60 拙訳。Trumper, "The Theological History of Adoption II," 182: "Calvin's decision (if conscious decision it was) to forego the discussion of adoption in a separate chapter or section of the Institutes was to have a lasting negative impact on the subsequent theology of later Calvinism."

にあるキリストとの結合の見落とし、⑤神の父性の問題。以下、これら問題点の要点を述べる。

1 一貫性を欠く方法

Adoption の取扱いにおいてカルヴァンを高く評価する一方、宗教改革期の信条が Adoption を見過ごしにしてきたと結論づける上で、トランパーの方法は実は一貫性を欠いている。既述したように、信条分析においては信条が Adoption を個別の論点(*locus*)として主題的に扱っているかどうかを重視したトランパーであるが、「Adoption の神学者」と彼自身が評したカルヴァン自身は、キリスト教綱要において Adoption に章も項目も充ててはいなかったのである⁶¹。それに関してトランパーは以下のように述べている。「カルヴァンが、ある教理を重視しているか否かは、その議論に充てている章の数によってではなく、むしろ著作中でいかに頻繁に言及しているかによって確認される」⁶²。トランパーは実際に自らの論考の中で、そうしたカルヴァンによる Adoption への頻繁な言及を明らかにしたのだが、それならば信条分析においても、信条が章立てとは異なる方法、すなわち頻繁に Adoption に言及しているものがあるかどうかを見るべきではなかったか。しかしトランパーがそうした精査をしている形跡は見当たらないのである。

2 トランパーの方法の限界

信条が章立て等により主題的に扱っているかどうかで、その信条が Adoption を重視しているかどうかを判断する方法には限界があることも指摘しなければならない。なぜなら、そもそも信条というものは、それが成立した教会の文脈の影響を受けているからである。つまり当時の教会で議論された論点に焦点を当てる傾向があり、当然それは章立てを含めた信条の書式にも影響を与えることになる。シャッフも言う。「信仰告白文書というものは常に教義的論争の所産である」⁶³。しかしトラ

61 Ibid.

62 拙訳。Ibid., 183. “The ascertaining of the importance of a doctrine for Calvin is determined not by the number of chapters allotted to its discussion but how pervasively it is referred to throughout his work.”

63 拙訳。Schaff, *The Creeds of Christendom*, 1:4: “A confession of faith is always the result of dogmatic controversy.”

ランパーは、こうした信仰告白文書の性格に注意を払っていないかのようなのである。トランパーが信条史における Adoption の見過ごしを結論づける際にシャッフに言及したことは既述したが、そこでトランパーは「信条はキリスト教教理や実践の土台全体を含む」と言及するシャッフの論考の一部だけを切り取り、教会の現場の論争が信条の書式等に与える影響については、シャッフによる同じ文章の続きであるにもかかわらずなぜか割愛してしまっている⁶⁴。

トランパーが、なぜシャッフの引用において一部を割愛したのか。その意図は不明だが、こうした一部のみの引用によって補強されたトランパーの結論は公平性を欠いていると言わざるをえない。なぜなら彼が引用しなかった、教会内の論争が信条の書式や構成に影響を与えるという、信条本来の性格を考慮するならば、単純に信条が章や項目を Adoption に充てているかどうかだけによっては、当該信条における教理の重要性を論じることはできなくなるからである。教会の文脈や歴史状況が信条に与える影響については、信条史の大家 J・ペリカン (Jaroslav Pelikan) も、宗教改革期に多くの信条が書かれた経緯説明に関連して以下のように述べている。「宗教改革期に多くの信仰告白文書が生まれた 1 つの消極的理由は、宗教改革による既存権威の危機に見られるように、神学論争解決の方法において一致 (*consensus*) が衰退したことである」⁶⁵。もしこのように宗教改革期の信条が、既存の権威に代わって神学論争を解決し、教会の一致を確認する役割を担っていたのであれば、信条が章立てをしているかどうかという信条の書式、構成だけによって、当該信条内における特定の教理の重要性を判別することはできないであろう。そうした信条の書式等によってまず見えてくるのは、その信条が書かれた教会の文脈において何が神学的に議論されていたのかという歴史や政治状況であって、教理の重

64 Trumper, “The Theological History of Adoption I,” 13. トランパーが引用したシャッフの言説は以下の通り。“A creed may cover the whole ground of Christian doctrine and practice, or contain only such points as are deemed fundamental and sufficient.” 本来これに続いている “or as has been disputed” をトランパーは割愛している。

65 拙訳。Jaroslav Pelikan, *Credo—Historical and Theological Guide to Creeds and Confessions of Faith in the Christian Tradition* (New Haven: Yale Univ. Press, 2003), 462: “One possible negative explanation for this growth of confessions is the corresponding decline, just as the crisis of authority represented by the Reformation was erupting, in any consensus about how to resolve theological debates.

要性を論じるためには、その他の要因も加えて多角的に判断しなければならないはずである⁶⁶。

3 「教理」という語彙の含意するもの

次に Adoption を扱う上で、果たして「教理 (Doctrine)」という語彙が妥当であるかについても考えたい。彼の博士論文 “An Historical Study of the Doctrine of Adoption” のタイトルも示すように、トランパーは Adoption が1つの教理であることを常に強調しているが、そうした態度は他の論考にも現れている。例えば Adoption を論点 (*locus*) として取り上げているウェストミンスター大小教理問答 (大教理 74、小教理 34) の解説において多くのピューリタンが Adoption を主題的に扱っていないことに関し、トランパーは以下のような不満を述べている。「彼らは大小教理問答からの説教や解説において、それ (Adoption) が1つの主題 (theme) であることを認識しているにもかかわらず、その教理 (Doctrine) を個別の論点 (*locus*) として扱っている者は稀である」⁶⁷。このようにトランパーの言説には、教理であるからには Adoption を主題的に1つの論点として取り扱うべきとの主張が常に含まれている。

ただ誤解のないように断っておくが、筆者は Adoption が1つの教理であるとす

66 例えばカルヴァンがその執筆過程に関わったフランス信条 (*Confessio gallicana*, 1559年/1571年) は、全40条のうち Adoption への言及が第17、22条に僅かに見られるのみである。これをもって同信条の Adoption 軽視を即断できないことは明白である。“The French Confession, 1559/1571” in *Creeds and Confessions of Faith in the Christian Tradition* (hereafter *CCF*), ed. Jaroslav Pelikan and Valerie Hotchkiss (New Haven: Yale Univ. Press, 2003), 2: 379–81. 同信条原文は以下。Fatio, 1986 ed., 120, 122 in CD-ROM of *CCF*. 同信条とカルヴァンの関係については以下。Erik A. de Boer, “Confession de Foy, faite d’un commun accord par les François qui desirent vivre selon la pureté de l’Evangile de nostre Seigneur Iesu-Christ 1559–Introductie” in *Confessies–Gereformeerde geloofsverantwoording in zestiende-eeuw Europa*, ed. M. te Velde (Heerenveen: Uitgeverij Groen, 2009), 355–66.

67 Trumper, “An Historical Study of the Doctrine of Adoption,” 21–22: “It [adoption] was a theme they were cognizant of in sermons and expositions of the Shorter and Larger Catechisms for instance, but too few of them dealt with the doctrine as a distinct theological *locus*.”

ることに異を唱えているわけではない。筆者が指摘したいのは（英語特有の問題かもしれないが）教理 (Doctrine) という語彙が用いられる場合、そこには1つの含意、すなわち教理だから主題的、或いは1つの論点として扱うべきという主張も含まれてくるということなのである⁶⁸。もちろん Adoption は1つの教理であり、それを主題的に扱うこと自体には何ら問題はない。しかし上述の「Adoption の複数の役割」で指摘したように、Adoption には1つの神学体系や枠組みの中で他の教理と教義領域を横断して繋がっていくという、言わば1つの体系内の構成原理 (organizing principle) もしくは複数の教理を結ぶ「根底の主題 (underlying theme)」⁶⁹ にもなりうる特性がある。そうした特性を思う時に、Adoption を1つの教理として主題的に扱うことによって、その特性が隠れてしまう可能性もあるという点を筆者は指摘したいのである。

例えば「義認」や「聖化」は Adoption と同じく救済論を主領域とする重要な教理であるが、Adoption のように1つの神学体系内で根底を流れる主題となりうるような特性は、この2つの教理にはない⁷⁰。「義認」「聖化」は救済論の領域で主題的に扱われるべき重要な論点であり、もしそのように扱われていないとしたら、それは不十分であるというべきであろう。しかし Adoption の場合は状況が異なり、WCF（或いは大小教理問答も含んだウェストミンスター信仰基準）のよう

68 *Encyclopedia of the Reformed Faith* は “Doctrine” を以下のように定義する。“In contemporary usage it [doctrine] may mean the general teaching of the church (e.g. Christian doctrine), teaching of a church or tradition (e.g., Presbyterian; Reformed doctrine), or a specific tenet of faith (e.g., the doctrine of predestination).” *Encyclopedia of the Reformed Faith*, ed. Donald K. McKim (Louisville: Westminster/John Knox Press, 1992), 106. ここで Doctrine の意味として言及される “tenet of faith” は「信仰の信条」等と訳される語彙であるが、その例として「選びの教理 (the doctrine of predestination)」が挙げられているように、主題的に扱うことを前提とするニュアンスを含む。より簡潔な定義としては以下。 *Pocket Dictionary of Theological Terms*, ed. Stanley J. Grenz (Downers Grove: InterVarsity Press, 1999), 40: “A theological formulation that attempts to provide a summary statement of Scripture on a particular theological topic.” ここでは Doctrine を「特定の神学論題の聖書的要約の提供を試みる定式」とし、やはり主題的に教理が扱われることを前提としている。

69 Peterson, op. cit., 7; Ferguson, “The Reformed Doctrine of Sonship,” 86–87.

70 例えば聖定の領域で、義認や聖化を他の教理と関連付けながら展開することが可能であろうか。

な主題的な扱い以外の方法も可能なのである。例えばカルヴァンが章立てではなく、(神学体系に織り込むかのような) 頻繁な言及をもって、他の教理に繋がっていく Adoption の特性を明らかにしたような、そうした取扱いも Adoption には可能となる。この神学的可能性を考慮する時に、筆者は Adoption に「教理」という語彙を充てることには慎重であった方が良いと考えている。Adoption を「教理 (Doctrine)」⁷¹ と呼んでしまうことで、それを展開する方法上の選択の幅を狭めてしまう可能性にも留意が必要ではないか。Adoption の持つ教義展開上の豊かな可能性を閉じてしまわないための熟慮もまた語彙選択に求められることを指摘したいと思う⁷²。

4 キリストとの結合に関連して

教理と教理を繋いでいく Adoption の教義上の特性を考慮する時、1つの信条内における Adoptio の重要性を判断する際には、それが他の教理とどのように関係しているかをも検証する必要がある。神学体系の「構成原理」⁷³ となりうる Adoption には、当然その周辺に Adoption と分かちがたく繋がっている幾つかの教理があり⁷⁴、それらに注意を払う中で見えてくる視点もあるからである。そうした諸教理の中で最重要のものの1つに「キリストとの結合 (union with Christ)」がある。教義学的に言えば、この結合は Adoption の恵みの源泉と見なされているが⁷⁵、トランパーは Adoption の主題的取り扱いにこだわるあまりか、信条を精査す

71 語彙の歴史的成り立ちから見ても「教理 (Doctrine)」は、使用が難しい語彙であると思われる。Pelikan, op. cit., 64-88を参照。“Confession of the Faith as Doctrine”の項でペリカンは、“Doctrine”という語彙の歴史的背景を探求し論じている。

72 Saito, “Divine Adoption,” 351-54 は、Adoption を論点 (locus) としてではなく、構成原理 (organizing principle) とすることによって提示できる神学体系の可能性について論じている。

73 Ferguson, “The Reformed Doctrine of Sonship,” 86-87.

74 Trummer, *When History Teaches Us Nothing*, 2.

75 “huiiothesia” は、子性を表す *huios* と *titheme* (put, place) から成る合成語である。新約中の *huios* (単数) が第一義的に御子キリストの子性を示すことから分かるように、聖書において *huiiothesia* は、信仰者をキリストの子性に与らせる神の恵みを表す。G. Kittel and G. Friedrich ed., *Theological Dictionary of the New Testament*, abridged in one volume ed., trans. G. W. Bromiley, s.v. “huios, huiiothesia”; Ridderbos, *Paul*, 199; ハイデルベルク

る際に「キリストとの結合」に注目することを怠っている⁷⁶。

5 神の父性との関連

上記の「キリストとの結合」と並んで、Adoption と不可分の関係にある教理に「神の父性 (Fatherhood of God)」がある。信条を精査する際には、特に救済論的文脈において⁷⁷、神の父性に注視することを忘れてはならない。*huiiothesia* を概観した際に見たように、Adoption における神の父性は、救済の計画における「神の子への選び」を起点とした「父」としての愛によって特徴づけられる。その父性により、神はキリストにあって私たちを子とし、御霊を与えて導き、終末においては御国の相続に与らせることで子としての身分を完成させようとしている。そのように Adoption が語られる時には、実は常に神の父性が前提とされているのである。逆の言い方をすれば、救済論的文脈で父性が語られる際には、(たとえ Adoption への直接的言及がなかったとしても) Adoption が前提とされているとも言えよう⁷⁸。しかし信条を精査するにあたり、トランパーがこの父性に注視している形跡は見当たらないのである。

信仰問答、問 33「キリストだけが永遠からの本来の神の御子だからです。わたしたちはこの方のおかげで、恵みによって神の子とされているのです。」吉田隆訳『ハイデルベルク信仰問答』新教出版、2016 年、35 頁；WCF 26.1 は結合をキリストの恵みに与ることと定義するが、Adoption は WCF において、義認、聖化と並び、キリストによる救済の恵みを代表している。Trumper, op. cit., 62; Ferguson, “The Reformed Doctrine of Sonship,” 87; 佐野、前掲論文、87 頁

76 Saito, “Divine Adoption,” 281, n.33, 353. 信条が Adoption を扱う際には、Adoption という語彙を用いずに概念を述べているということがある。筆者はそれを「Adoption への概念的言及 (conceptual reference)」と呼んでいるが、教義的源泉である「キリストとの結合」に注視すると、こうした概念的言及が明らかになってくる例が多くある。

77 Saito, “Divine Adoption,” 3, 42. 神の父性には 3 つの側面がある。①三位一体論的側面 (三位一体の交わりにおける子なる神、御霊との関係における父性)、②創造論的側面 (天地創造における創造主としての父性)、③救済論的側面 (救い主キリストを通し、Adoption により示される父性)。本稿主題と関連性があるのは救済論的側面である。

78 父性が語られる時にも (注 76 で言及した)「Adoption への概念的言及」が多く見られる。

第4章 信条史分析のもう1つの方法⁷⁹

以上、筆者はトランパーの方法上の問題を指摘した上で、改革期の信条分析においては、Adoption そのものへの言及の他に「キリストとの結合」「神の父性」という関連性の深い2つの主題にも注視しなければならないことを指摘した。これら2つに加え本稿は、信条分析においてはさらにもう1つ、教義領域を横断的に繋ぐ「Adoption の複数の役割」にも注視する必要があることを以下で論じるが、それについてはまずカルヴァンに触れることから始めていく。

第1節 カルヴァンにおける Adoption の概念の特性

本稿は、トランパーの信条分析に2つの歴史的流れの欠如、すなわち改革初期からカルヴァン、そしてカルヴァンから WCF に至る歴史的な流れの欠如があることを問題として批判した。トランパーの分析は、あたかもカルヴァンと WCF が宗教改革期の脈絡における神学的影響から全く自由な、孤高の存在であるかのような印象を与えかねないものであり、それを筆者は問題視したのである。

勿論本稿は、カルヴァンが宗教改革期の Adoption 理解において重要な神学者であることを否定しているわけではない。昨今の研究を通じ、Adoption 理解におけるカルヴァンの重要性は、主要な神学者の間ですでに共通認識となっていることについては既に述べた通りである。けれども、ここになおカルヴァンに関する評価を巡って不鮮明な点が1つあることを指摘しておきたい。それは Adoption の神学的取り扱いにおけるカルヴァンの特性とはいったい何であるのかが、必ずしも明確になってはいないという点である。この点が明確にされない限り、宗教改革初期からカルヴァンに至る流れ、そしてカルヴァンから WCF に至る流れを同定し、そこにどんな神学的影響の伝達があったかを明確にすることは難しいと言わざるを得ない。

前述したようにトランパーは、カルヴァンにおける Adoption の取扱いにおける特性を「(Adoption への) 頻繁な言及 (pervasive manner)」にあるとしていた⁸⁰。この「頻繁な言及」は、論理的には理解できるが、信条の精査における実際の方法としては役に立たない。なぜなら、いったいどれくらいの頻度で言及があれ

79 Saito, "Divine Adoption," 43-48.

80 Trumper, "The Theological History of Adoption II," 183.

ば「頻繁」と言えるのか、その判断における尺度が曖昧なままだからである⁸¹。

それでは信条分析における方法としても実用可能なカルヴァンの特性とはいったい何であるのか。ここで重要な示唆を与えてくれるのが佐野泰道によるキリスト教綱要の最終版（1559年、以下、綱要最終版）分析である。佐野は綱要最終版における Adoption の取扱いを分析した上で、その神学体系中、Adoption には2つの教義領域における内容が含まれていることを指摘して結論としている。『子とすること』の教理は、選びから完成に至る神の恵みの支配という時間軸において、我々がキリストを信じるという救済論の内容と、神を信じて生きるという教会論の内容を同時に持ち合わせる教理であると言える⁸²。

ここで佐野が指摘している点は、換言すれば、本稿が既述した Adoption の複数の役割、すなわち神学体系中、領域横断的に教理と教理を繋いでいく Adoption の教義上の特性と重なってくるものである。神学史の観点から見れば、16世紀の段階においてカルヴァンがすでにこの Adoption の複数の役割に気づいていたということは注目すべき点であろう。特に WCF 以後の17世紀のプロテスタント正統主義以来、Adoption を専ら義認の領域で法的側面からのみ理解するようになっていった神学史⁸³に照らせばなおのこと、こうしたカルヴァンの Adoption 理解は特筆

81 本稿脚注66における「フランス信条」の例が示すように、もしトランパーの言う「頻繁な言及」を基準に判断するならば、第17、22条において Adoption への僅かな言及が見られるだけの同信条にカルヴァンの影響を見ることは困難であり、同信条は Adoption を軽視していると判断せざるを得ないことになるであろう。

82 佐野、前掲論文、106頁。この結論に関連付けられる佐野論文中の脚注121も参照。「これは、ウェストミンスター信仰告白において、『子とすること』の教理が義認と聖化の橋渡しのように理解されているような意味ではない。我々は、カルヴァンの『子とすること』の教理が、選びから完成という聖定の中に位置づけられていることを明らかにしたのである。確かに、カルヴァンは『子とすること』において、義認と聖化が切り離されないものであることを明らかにした。しかし、『子とすること』の教理は、さらに広い枠組みを持っているのである。」

83 Saito, "Divine Adoption," 22-25. Adoption が17世紀正統主義以降、専ら義認論の領域のみで取り扱われるようになる大きな要因として、Adoption を義認の積極的側面と定義したトレティーニ (Francis Turretin, 1623-87年) の影響が指摘されている。彼はその著書 *Institutio theologiae electicae* において、義認の消極的側面を罪の赦しとし、積極的側面を Adoption と説明した。F. Turretin, *Institutio theologiae electicae* 16.6.1. トレティーニの著者は2つの世紀にわたり、欧米の改革派系の大学神学部や神学校にて組織神学のテキストとし

すべきものと言える。さらに付言すれば、前述したように、Adoption が神学体系の中で複数の役割を担っている点は、20 世紀後半から今日までの神学者たちの研究の中で共通認識の 1 つとして定着した点でもあった。そうした Adoption の複数の役割に、16 世紀半ばにすでに気づいていたカルヴァンの Adoption 理解は、十分に彼の特性と呼ぶに値すべきものではないだろうか。

それゆえに本稿は、宗教改革期の信条分析において、この「Adoption の複数の役割」に注視する方法をも提案する。すなわち信条を分析する際には、Adoption が義認論以外の複数の教義領域でも扱われているかどうかに注視し、それをもって改革初期からカルヴァンへと繋がる流れ、あるいはカルヴァンから WCF に至る流れや神学的影響を同定していく手掛かりとしたい。

第2節 3つの神学的レンズを通し

前節までの論考を通じて本稿は、宗教改革期の信条分析の方法において、Adoption の主題的な取り扱い以外に、以下の3つの主題にも注視すべきであることを指摘した。すなわち、①キリストとの結合、②神の父性、③ Adoption の複数の役割の3つである。これらを「神学的レンズ」として用いながら信条を精査、分析していくならば、それまでには見えなかった視野が開かれてくることに気づかされるであろう。

それでは、これら3つの神学的レンズを用いると、果たしてどのような視野が開けていくのか。宗教改革期の3つの信仰告白文書（2つはカルヴァン前、そして1つはカルヴァン後）を実例として挙げて、以下、簡潔に提示していくこととする。

1 ルター小教理問答（1529年）

最初の例は、宗教改革第一世代のルターによる小教理問答である。神学史または信条史においてルターを Adoption の観点からどう評価するかは、神学者の間で

で使用され、とりわけ古プリンストン学派には大きな影響を与えたと言われる。F. Turretin, *Institutes of Elenctic Theology*, trans. George M. Giger, ed. James T. Dennison, Jr. (Phillipsburg: P&R Pub., 1994), 2:666; Ferguson, "The Reformed Doctrine of Sonship," 83; Trumper, "The Theological History of Adoption II," 186-87; D.F. Kelly, "Adoption: An Undeveloped Heritage of the Westminster Standards," *Reformed Theological Review* 52 (1993), 112.

も見解が分かれているが⁸⁴、全体としてはルターの Adoption 理解に言及する神学者は稀であると言えよう。実際、ルターの主要な信仰問答である小教理問答には Adoption への直接的言及を認めることはできない。

しかしながら神学的レンズの1つである「神の父性」を通して小教理問答を精査すると、これまでとは違った視野が開けていく。小教理問答は Adoption や信仰者を神の子とする神の働きについては触れてはいないものの、18回にわたる箇所において神を父と呼ぶか、あるいは神の父性と関連する語彙を用いている。もちろん、それら18回の中には、単に神を「父」と呼ぶのみで、神学的論考を深められるほどの重要性を持たない箇所もあるかもしれない⁸⁵。しかし18箇所中、少なくとも8箇所は、たとえ簡潔ではあっても父なる神と神の子らの関係に言及しながら、信仰者を神の家族の観点から捉える「救いの家族的側面 (familial aspect)」を描いていると認められるのである⁸⁶。このように、たとえ Adoption への言及は認められず、

84 Saito, "Divine Adoption," 17. パッカーはルターが Adoption を義認同様に強調したと見ている。パッカー、前掲書、415頁。しかし、その他の二次資料の多くは、ルターの著述には Adoption が欠けていると指摘している。J. Scott Lidgett, *The Fatherhood of God in Christian Truth and Life* (Edinburgh: Kessinger Pub., 1902), 251; Ferguson, "The Reformed Doctrine of Sonship," 83.

85 しかしながらピーターソンは、信仰者が神を父と呼ぶこと自体に救済論上の意義があると主張している。Peterson, op. cit., 182.

86 例えば使徒信条を抜く第一条において、小教理問答は、神の子らの日毎の必要を満たす「父としての、神のいつくしみとあわれみ」に言及している。マルティン・ルター、ルター研究所訳『エンキリディオン 小教理問答』リトン、2016年、32-33頁。ドイツ語原文は以下を参照。*Die Bekenntnisschriften der evangelisch-lutherischen Kirche* (hereafter *BLK*), 11th ed. (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1992), 511: "Aus lauter väterlicher, göttlicher Güte und Barmherzigkeit." その他にも、主の祈りの導入において小教理問答は「父」の呼称を4回繰り返し、天の父と神の子らの間にある愛の関係に言及している。ルター、前掲書、35-36頁; *BLK*, 512. 主の祈りにおけるその他の注目すべき「父」への言及は以下の通り。①第一の願い：願いを実現するための「父よ」との親しい呼びかけが2回。ルター、前掲書、37頁; *BLK*, 512. ②第二の願い：(神の国到来のために) 神の子らに聖霊を与える天の父への言及。ルター、前掲書、38頁; *BLK*, 513. ③第五の願い：「負い目」を赦す天の父への言及。ルター、前掲書、40頁; *BLK*, 514. ④第七の願い：地上では神の子らを悪から守り、終末においては天に招き入れる天の父への告白。ルター、前掲書、42頁; *BLK*, 515. ⑤主の祈りの結び：

また（小教理問答の特性上）簡潔な言及であったとしても、その簡潔さの中でおお、8回にわたり父なる神と神の子らの存在する家族的関係を描いているとすれば、その神学的意義を見過ごしにすることはできないであろう⁸⁷。

2 四都市信仰告白（1530年）

「Adoptionの複数の役割」に注視することで新たな視野が開けるのは、南ドイツの4教会（シュトラスブルク、コンスタンツ、メミンゲン、リンダウ）によって採択された四都市信仰告白である⁸⁸。改革派の初期に属する同信仰告白は、簡潔ではあるが義認論の文脈だけでなく、聖化論、教会論の文脈においてもそれぞれAdoptionに言及している。例えば「義認と信仰について」扱う第3章の終わりにおいて、御霊によって促されつつ「アバ、父」と呼ぶ、神の子としての確信に言及している⁸⁹。その後、聖化論を扱う第4章、5章において、信仰者の良きわざの土台となる（Adoptionによる）神の子の身分について簡潔な言及が見られる⁹⁰。そして第15章においては、神の子らによって獲得される場所としての教会を「神の家」

祈りを聴いておられる天の父への確信；BLK, 515. その他「朝の祈り」、「夕の祈り」においても天の父への豊かな告白が認められる。ルター、前掲書、55-57頁；BLK, 521.

- 87 ルターの大小教理問答における「神の父性」という主題については、筆者の博士論文のリサーチ本体で詳細に扱っている。Saito, "Divine Adoption," 98-110.
- 88 主な著者をプーツァー及びカピトーとする同信仰告白は、1530年のアウグスブルク帝国議会に南ドイツの改革派の立場を表明するものとして提出された。公認本文テキストはドイツ語、ラテン語による。Saito, "Divine Adoption," 111-14; CCF, 2:218; Schaff, op. cit., 1:527.
- 89 *Reformierte Bekenntnisschriften* (hereafter *RBS*), Bd. 1/1, 1523-1534, hrsg. Heiner Faulenbach und Eberhard Busch (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2002), 463: "Auß recht kindtlichen vertrauen ihn unseren got und vatter anruffen, und sprechen: Abba vatter (子としての確信をもって私たちの神であり父に呼びかけるのである「アバ、父よ」と)." 括弧内は拙訳。ラテン語本文は以下。Niemeyer in the CD-ROM of CCF, 747. 英訳は以下。CCF, 2:223.
- 90 *RBS*, 1/1:464: "Uns als bald anderen menschen als götter, das ist, ware kinder gottes ertzeigen (私たちを他者に神々として、すなわちまことの神の子どもたちとして示すのである)." Ibid., 465: "Alle die durch den geyst getrieben werden, die selbigen sind kinder gottes (すべて御霊に導かれる者は神の子どもたちである)." それぞれ括弧内は拙訳。ラテン語本文：Niemeyer, 747-48. 英訳：CCF, 2:224.

と家族的に表現している⁹¹。

以上、四都市信仰告白は、僅かな言及ではあるものの、信仰告白全体の神学体系中、3つの教義領域において Adoption やそれに関連する神の家族的主題に触れており、こうした宗教改革初期の告白文書における言及は、後のカルヴァンへと繋がる可能性、或いは神学的影響のヒントとも成り得るものであろう。

3 ハイデルベルク信仰問答 (1563 年)⁹²

神学的レンズとして「キリストとの結合」が有効なのは、カルヴァン後の信条史を代表する文書の1つ、ハイデルベルク信仰問答である。同信仰問答中、直接 Adoption と関連性を持つと思われる問答はわずか2つ（問33、120）⁹³であるが、ここで注目すべきは信仰問答全体の主題に言及している問1である。「ただ一つの慰め」を問う第1問に対し、同信仰問答は慰めの本質が「キリストとの結合」であることを以下のように告白していく。「わたしが（中略）わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです」⁹⁴。しかもこの第1問の注解の際、同信仰問答の主要な著者ウルグヌス（Zacharias Ursinus）は、この慰めは6つの要素から成るとし、しかもその第1の要素は神との和解にもとづく「神の子の身分(sonship)」であると説明している⁹⁵。

91 RBS, 1/1:479: “Eyn hauß Gottes (神の家).” 括弧内は拙訳。ラテン語本文: Niemeyer, 758. 英訳: CCF, 2:235.

92 近年、ハイデルベルク信仰問答 450 周年を前後して、同信仰問答については多くの研究書が出版されている。緒論理解の上で参考となる邦訳は以下。L・D・ビエルマ、吉田隆訳『「ハイデルベルク信仰問答」の神学—宗教改革神学の総合』教文館、2017年。ライル・D・ビエルマ、吉田隆訳『「ハイデルベルク信仰問答」入門—資料・歴史・神学』教文館、2013年

93 問33「わたしたちはこの方のおかげで、恵みによって神の子とされているのです。」吉田、『ハイデルベルク信仰問答』、35頁。ドイツ語本文は“wir . . . zu kindern Gottes angenommen sind”と神による Adoption のわざを明示している。RBS, 2/2: 183. 問122「神がキリストを通してわたしたちの父となられ」。吉田、前掲書、109頁; RBS, 2/2:207.

94 吉田、前掲書、9頁; RBS, 2/2:175: “Das ich . . . meines getrewen Heilands Jesu Christi eigen bin.”

95 Zacharias Ursinus, *The Commentary of Dr. Zacharias Ursinus on the Heidelberg Catechism*, trans. G. W. Williard (Phillipsburg: Presbyterian and Reformed Pub., 1852), 18: “This comfort consists of six parts: 1. Our reconciliation with God, through Christ,

以上、教義学的に Adoption の源泉である「キリストとの結合」が、同信仰問答の主題「慰め」の本質として信仰問答全体の根底を流れていることを思う時に、私たちはハイデルベルク信仰問答を Adoption の観点から軽視することはできない。同信仰問答全体を覆う「関係的 (relational)」或いは「家族的 (familial)」な語調は、明らかにハイデルベルク信仰問答の構成原理⁹⁶である「結合」から来ているものであり、ここに(同じく「キリストとの結合」を重視した⁹⁷)カルヴァンの影響を推測することは可能であると言える。

結論

トランパーの信条史分析における主な問題は、宗教改革期の信条分析において、Adoption の取扱いに関し2つの歴史的な流れが欠落していることであった。1つは宗教改革初期から改革第二世代のカルヴァンへと至る流れであり、もう1つはカ

so that we are no longer the enemies, but *the sons of God*.” 斜字体は筆者による付加。ウルジヌスによる注解は、彼のハイデルベルク信仰問答講義を聴いた弟子たちによる講義録を編集したもの。講義録に関しては、多様な版が欧州各地に散見するため、どこまでウルジヌスの実際の講義に近づけるかについて議論がある。議論については以下を参照。Kees de Wildt, “Commentaren op de Heidelbergse Catechismus, 1567-1620,” in *Handboek Heidelbergse Catechismus*, ed. A. Huijgen, J. V. Fesko, and A. Siller (Utrecht: Uitgeverij Kok, 2013), 85-95.

- 96 齋藤五十三「ハイデルベルク信仰問答の実践的方向性」(『キリストと世界』第28号、東京基督教大学、2018年、39頁)の「HC キリストへの“結合”チャート」を参照。Thorsten Latzel, *Theologische Grundzüge des Heidelberger Katechismus: Eine fundamentaltheologische Untersuchung seines Ansatzes zur Glaubenskommunikation*, Marrburger Theologische Studien 83 (Marburg: N. G. Elwert Verlag Marburg, 2004), 52; W. van Vlastuin, “The Promise of Unio Mystica: An Inquiry into the Functioning of a Spiritual-Theological Concept in the Heidelberg Catechism,” in *The Spirituality of the Heidelberg Catechism: Papers of the International Conference on the Heidelberg Catechism Held in Apeldoorn 2013*, ed. Arnold Huijgen (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2015), 169: “The mystical union . . . is . . . present in the vital and visible skeleton of this catechism.”

- 97 Calvin, *Institutes*, 3.1.1.

ルヴァンから WCF に至る流れである。これらの欠如のために、宗教改革期の信条史は、Adoption に関して極めて不鮮明なものとなってしまった。この問題を克服するために本稿は、トランパーの方法上の問題を指摘し、その上で改革期の信条分析の方法においては、Adoption への主題的言及だけでなく、「キリストとの結合」「神の父性」「Adoption の複数の役割」という関連の深い主題にも注視すべきであると提案したのであった。

Adoption に加えて、これら 3 つの主題（神学的レンズ）を通じて信条を再度分析していくと、そこにはこれまでには見えなかった視野が広がっていく。ルターの小教理問答や四都市信仰告白のような宗教改革初期の告白文書の中には確かに、カルヴァンの Adoption 理解の萌芽とも呼びうる視点が埋もれていた。またカルヴァン後の代表的な告白文書の 1 つ、ハイデルベルク信仰問答においては「キリストとの結合」を巡り、カルヴァンから受け継いだ神学的影響の可能性を見ることができたのである。

以上、宗教改革初期からカルヴァン、そして WCF に至る信条史には、Adoption を巡る歴史的な流れを認めることが可能であり、そこにある神学的影響の伝達は、十分に研究対象となりうる主題であると言える⁹⁸。そうした改革期の諸信条において Adoption は、たとえ主題的な取り扱いを受けていなくとも、構成原理もしくは根底を流れる主題として、教義領域を横断しながら他の教理と繋がりつつ、贖罪的救済史観を持つ神学体系を示していたのであった。

98 筆者の博士論文のリサーチ本体においては、信条史をカルヴァン前、カルヴァンの時代、カルヴァン後と 3 区分し、Adoption 及び福音の家族的側面がどのように展開されているかを精査、分析している。以下を参照。カルヴァン前：Saito, "Divine Adoption," 91-143. カルヴァンの時代：Ibid., 144-201. カルヴァン後：Ibid., 202-74.